

コペル君とその時代から

野上 暁

「日本少国民文庫」と山本有三

吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』が、山本有三編纂の「日本少国民文庫」全一六巻の最終配本として刊行されたのは、一九三七（昭和一二）年八月一〇日。中国北京市の西南部、盧溝橋で日本軍と中国軍が衝突して日中戦争が始まったのは七月七日で、一月一三日には日本軍が南京を占領し、南京大虐殺事件を起こしている。翌年の四月には、国家総動員法が公布され、戦時体制下で言論統制も強化されていく。一〇月には内務省警保局図書課から「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が関係各方面に通達されて、子どもの本の統制も具体化していく。『君たちはどう生きるか』を含む「日本少国民文庫」は、日本中がまさに戦争に向かって突き進む真ただ中で刊行され続けたのだ。

丸山真男は、岩波文庫版の巻末解説「『君たちはどう生きるか』をめぐる回想——吉野さんの霊にささげる——」

で、刊行当時すでに大学の助手として、作中の叔父さんに近い立場で読んだ時の衝撃を語っている。そこで、自身が高等学校二年生のときに本富士署に逮捕された体験を引き合いに、「吉野さんは、わたしの場合などとは比較を絶するような特高体験があります」と述べている。一九二八年の治安維持法改定により、国体変革を目的とした結社行為に極刑を与えるばかりか目的遂行罪まで追加し、三三年には小林多喜二が拷問死させられるなど、弾圧が厳しい時代だったことを考えると、当局にもいらまれていた吉野が、よくぞこのような出版物を刊行できたと思えるのだが、そこにはこのシリーズを企画した山本有三の特異な立ち位置が関わっている。

山本有三は、一高で近衛文麿や土屋文明や豊島与志雄らと一緒だったが、ドイツ語の試験で落第したこと、芥川龍之介や菊池寛らと同級になる。そこから彼らとの交流が始まるのだ。東大独文科を卒業後は早稲田大学のドイ